特別寄稿

西高への想い

衆議院議員　横路 孝弘

司馬遼太郎さんから褒めていただいた「考古学者の沢山出る学校はいい学校です」

私が西高に入学したのは昭和３２年です。出身中学校は啓明中ですが、中学３年の時に乗っていた車が横転する交通事故にあい、１年半札幌医大に入院し、小・中学生の同級生から１年遅れて西高に入りました。

ですから友達は西高でいうと９期と１０期入学の二つの期にわたっています。しかし入学して１年生の途中、父が東京で一人で生活をしていたので東京に転校してしまいました。１年の途中までしかいないのに、西高生として仲間に入れていただいたことは大変ありがたく感謝しております。そして、今なお西高の時代からの友達として親しく付き合っている方が何人もいます。

私が知事に就任した時、最初の高野秘書課長も町田秘書官も、いずれも西高の卒業生で、役所もやるものだと感心しました。

また、西高というと思い出すのは、作家の司馬遼太郎さんが二度ほど私の知事時代に北海道に来て講演をしていただいたことです。その時のテーマは「北方との交流」でした。そのきっかけを作ったのは、北海道開拓記念館に学芸員として長くおられた野村崇さんです。野村さんは、司馬遼太郎さんが来ると必ずご案内をしていました。実は、西高出には考古学の専門家が沢山おり、東大の教授だった宇田川洋さんをはじめ何人もおられます。

当時、西高には考古学のサークルがあって、網走のモヨロ貝塚の発掘作業にクラブが参加したことがきっかけになり、考古学者が生まれたのです。最近では、「アイヌの世界」という本が出版され、この本によって北海道の新しい歴史に目を向けることができましたが、その本を書かれたのが、旭川市博物館の学芸員瀬川拓郎さんで、その方も西高のサークル出身であると野村さんから聞きました。

司馬遼太郎さんから「考古学者の沢山出る学校はいい学校ですね」と褒めていただいたことを昨日のことのように思い起こしております。

競争が激しい時代に独特の校風を持って、ゆったりといろいろな道を歩まれて活動している人々の多い学校で、これからもいろいろな人々が輩出することを心から祈っています。

人にとっての出合いは大切です。人との出会い、本との出会い、何か出来事との出合い、今の西高生には多くの出会いがある学校生活であることを願っています。

いつも同期の皆さんには、東京や地元札幌から輔仁会にお誘いを頂いていることに心から感謝を申し上げます。